

第99回 三方限古典塾 ('15. 1. 15)

洪 自誠 (1561~1616) 「菜根譚」 (その3-16)

1 事業文章は、身に随したがいて銷毀しょうきすれども、精神は万古ばんこに新たなるが如し。功名富貴こうめいは、世に逐したがいて転移すれども、気節せんざいは千載いちじつに一日なり。君子は信まことに、当まさに彼を以て此れに易かうべからざるなり。 前集 148

(意識) 事業や学問は肉体とともに滅びてしまうが、人間の精神は永遠に新しい命を得て、時代とともに生き続ける。名誉や財産は世の移り変わりとともに人から人へ移るが、信念を固く守って変えない節操は、千年一日のごとく受け継がれていく。君子たる者はこのことを肝に銘じ、一時的なものを永久的なものに取り替えるような愚をおかしてはならない。

(余説) ここで教えているのは、時代の推移や世相の移り変わりにつれて滅びてしまうものと、滅びないものとの判断し区別することの重要性です。自分の肉体は死と共に消えてしまいますが、その生き方は残された誰かの心の中に生き続け、その誰かが前に進む力となって残ることは可能です。そうなるように生きて死にたいものと考えます。

そのために、例えば中国清末ろじんの文学者で、広く中国の青年たちから熱愛・尊敬され、民族精神の象徴となった魯迅は「希望を持ち前進したい気持ちを持続できることが必要である。これは、現状に満足せず、将来に希望や夢、目標、あるいは今の状況を変えたいという気持ちを持続し、変化し続けること」だと言っています。

(参考) 魯迅 (1881~1936) 代表作に『阿Q正伝』、『狂人日記』など。

「自己満足しない人間の多くは永遠に前進し、永遠に希望を持つ。」

2 漁網もうの設おとくるや、鴻おほとり即ち其の中に罹かかる。蠹螂とうろうの食むさぼるや、雀すずめ又其の後に乗すず。機裡きりに機かを蔵し、変外ちごうに変たのを生ず。智巧何ぞ恃たのむに足らんや。 前集 149

(意識) 魚を捕ろうとした網に、大きな水鳥がかかることがある。餌をねらっているかまきりは、その後ろから雀がねらっていることを知らない。このように世間には、からくりの中からくりにからくりが隠されており、異変の外ちごうに異変がある。人間の小さな智慧やたくらみなど、何の頼りにもならない。

(余説) 人間社会にも自然界にも、思いがけないできごとが度々おこります。昨年も国の内外でいろいろとありました。そこには人間の小賢しい知恵など何の役にも立ちません。人間界の実情にも、目の前の利益を得ることに夢中で、自分の身に危険なわなが迫っているのに気づかないことが多いのではないのでしょうか。

(参考) 説苑せいえん (卷第九・正諫) 「園中に樹有り。其の上せみに蟬せみ有り。蟬高く居りて悲鳴し露を飲いしんみ、蠹螂とうろうの其の後に在るを知らざるなり。蠹螂は委身曲附いしんきよくふして蟬を取らんと欲して、黄雀こうじやくの其の傍かたわらに在るを知らざるなり。黄雀は頸くびを延べて蠹螂ういばを啄くまんと欲して、弾丸の其の下したに在るを知らざるなり。此の三者は皆務めて其の前を得んと欲して、其の後の患わずらい有るを願かえりみざるなり。」

3 人と作るに、^な点の^{しんこん}真懇の^{すなわ}念頭無くば、^{かし}便ち個の花子と成り、^{きよ}事々皆虚なり。世を
渉るに、^{だん}段の^{えんかつ}円活の^{きしゆ}機趣無くば、^{すなわ}便ち是れ個の^{ぼくじん}木人にして、^{しよしよ}処々に^{さわり}碍有り。

前集150

(意識) 人間であれば、一片の真実誠実な心がけを失ってはならない。そうでないと、乞食と変わりがなく、すべての事が偽りとなり信用されなくなってしまう。世の中を渡るためには、ちょっとした丸みのある如才のない気転が必要である。そうでないと、まったく役に立たない木偶の坊になってしまい、行く先々で壁にぶつかってしまう。

(余説) 儒教でいう「五常」の仁・義・礼・智・信の「信」が^{しんこん}真懇の念と縁が深いのではと考えます。孔子も、信、すなわち誠実さを失っては、もはや人間失格に近いと教えています。後半部分はやや前半と反対の意味にもなりそうですが、世知辛い世間を渡るには少しばかりは滞りなく切り回す気転も必要な場面に出逢うのが現実です。その双方ができるのが真の大人ではないでしょうか。花子は乞食を意味する明代の俗語のようです。

(参考) 論語(為政第二38)「子曰く、人にして信なくんば、其の可なるを知らず。大車に^{げい}輓なく、小車に^{げつ}軌なくんば、それ何を以て之を行らんや。」

(人間がもし信用をなくせば、どこにも使いみちがなくなる。馬車に^{ながえ}轆がなく大八車に^{かじぼう}梶棒がないようなもので、引っ張っていきようがない。)

4 水は波あらざれば、^{すなわ}則ち自ずから定まり、^{かがみ}鑑は^{くもり}翳あらざれば、則ち自ずから
明らかなり。故に、心は清くすべき無し。其の之を混らす者を去かば、^{せい}清自ずから
現わる。楽しみは必ずしも^{たず}尋ねず、其の之を苦しむる者を去かば、楽しみ自ずから
存す。

前集 151

(意識) 水は波さえ立たなければ自然と静まり、鏡は曇りさえなければ自然と明るく輝くものだ。同じように、人間の心もことさらに清くする必要はない。これを濁らせるものを取り除けば清らかさが自然にでてくる。楽しみも無理に自分の外に求める必要はない。苦しみさえ取り除けば、楽しみが自然と現れてくる。

(余説) これは禅宗の教えに近いように感じます。人の心は本来清浄なものであるので、生まれつきの本然の性をそのままに保ちつつ生きることが大切であると教えていますが、その実践はなかなかの難問です。

心が乱れ騒ぐとき、私たちは懸命になってその心を鎮めようとします。しかし、そうすればするほど、心はかえって乱れるのが通常です。嵐のときの荒波を静めることはできませんが、嵐が過ぎ去るといづれ静かになります。心が騒ぐ時には、無理をせずにそれをじっと待てというのでしょうか。

ところで、「本来の面目」という禅語があります。本来固有の自己とか、純粹無垢な自己とか、ありのままの真実の自己とかとも言われます。つまり、人々が本来備えている真実の姿であり、純粹な人間性のことです。

人にはとかく妄想や分別心があるために、本来の面目が現れないのであるから、その妄想や分別心などの迷雲を払拭すれば、心の明鏡(本来の面目)はおのずと本来の清明な姿にかえると、禅宗では教えています。(久須本文雄「禅語入門」大法輪閣)